

「世界の平和を考える」シリーズ第5回

用水路が運ぶ恵みと平和

～中村医師の働き～



用水路建設の中村哲医師（ネットより）

岡部 まさ子

栄養失調と貧困で沢山の人々が餓死、パキスタンやイランへ難民として流出する人も増加。若者がお金の為にタリバンや外国の傭兵になっていくのを目の当たりにして、中村氏はこの地での医療の限界を感じ、「水さえあれば」と命を繋ぐ水の大切さを痛感、2003年から用水路の建設を決断。ヒンズークシュ山脈の雪解け水を湛えて流れるクナル川から用水路を引く灌漑作業に着手。大干ばつで仕事を失った農民達の協力を得ながら、武器ではなく、つるはしとシャベルを持って作業に取り組み始めたのです。農民達は3度の食事と家族で暮らせるという希望を持って。

米国軍の完全撤退が本格化したアフガニスタンでは、イスラム主義組織タリバンが瞬く間に実権を掌握、首都カブールの空港には各国大使館職員、現政府や米国軍を支援した関係者の追跡が強化され、家族も含め逮捕されるのではと、出国を求める人波が押し寄せ、ガニ大統領はすでに出国済みとの報道。2001年アメリカ同時多発テロの首謀者として、米国はアルカイダのリーダー「ウサーマ・ビン・ラーディン」をタリバンが匿っている（後にパキスタンで殺害される）と、有志連合国と共に「テロの掃討作戦」と称し、空爆を続ける中、「武力では平和は築けない」と用水路建設に地元の人々と汗を流して働いているテレビに映った中村医師の姿が私の脳裏を過りました。

アフガニスタンは、かつてはシルクロードの要衝として栄え、大部分が山岳地帯でその谷間に20以上の部族が住む多民族国家です。人口の90パーセントが自給自足の農民でしたが、1979～1989年ソ連が侵攻、当時米国は共産化するのを危惧して、ウサーマ・ビン・ラーディン等に武器を供与、戦闘員として訓練をしていたが、ソ連が撤退した後も様々な思惑のなかで、内戦は絶え間なく続いています。2000年以降は気候変動による大干ばつに襲われて、農地は荒れ果て砂漠化が、加速されているとの事です。

中村医師は、1984年パキスタン北西部の都市ペシャワールに赴任、ハンセン病やアフガニスタン難民の診療に従事、その後、アフガニスタンのジャララバードに移動、医療に携わるが、干ばつからの水不足と食料不足で

灌漑工事は故郷福岡の筑後川にある江戸時代に造られた山田堰、柳川にある護岸に使用された金網の中に石をいれた蛇籠を積み上げ、柳の木を植え根を張らせてより頑丈にするやり方を導入。困難を乗り越えながら2010年、ガンベリー砂漠迄25.5キロのマルワリード用水路が完成。農民達は上手に石を割って蛇籠に入れ、手際よく積み上げていくそうです。水路の末端には集落を作り、用水路が常に手を入れ補修すれば、永久に使用出来るよう維持、管理者を育て村人達に未来を託したのです。また村人達の為、モスクと子ども達の学校を建てる事も忘れませんでした。

大地は今、緑の農地として蘇り、稲、小麦、トウモロコシや西瓜、人参、蕪等を生産、オレンジや葡萄がたわわに実り、もう飢餓の心配はありません。農民達が夢であった農作業に勤しみ、砂漠の大地で、無から有を産み出す喜びを味わう日常を取り戻す事が出来たのですが、中村氏は2019年12月8日護岸の修復に行く車中で、武装集団に銃撃され、帰らぬ人となりました。

今後、タリバン政権となっても、中村氏が蘇らせた緑の大地で、農民の人々が生産の喜びを味わい続けられるようにアフガニスタンの平和を願って。

*人間にとって、本当に必要なものはそう多くはない。少なくとも私は、「金さえあれば何でも出来て、幸せになれる」という迷信「武力さえあれば身が守られる」という妄信からは自由である。人は愛するに足り真心は信ずるに足りる。
—中村 哲—